

# 「届け、祭り太鼓」

【小学校中学年】

テンツクテン テンツクテン テケテン テンツクテン

「よし、雄二、よいリズムで太鼓をたたけているぞ。」

お囃子の指どうはやしをしてくれる地いきの明日香先生あすかの声がひびく。

今日は、幸手の夏の風物詩である八坂の夏祭り本番前最後の練習である。祭りが明日と  
いうことでみんな真けんな表情だ。大太鼓、締太鼓しめ、篠笛しのぶえや鉦かねなど、こきゅうを合わせ  
る。

初参加はつさんかのぼくは、周りの大人の人たちにはげまされ、正かくな一打いちだを打ちこむ。親友  
の良介りょうすけも必死だ。しかし、このような光景は少し前までのぼくには考えられなかった。

あれは、一年前のことである。祭囃子まつりばやしが聞こえてくる暑い夏にぼくは病室からその音を

聞いていた。ぼくは、小さいころから体が弱く、病気がちで入院をくり返していた。夕方になると祭囃子の稽古けいこの音が聞こえてくる。コロナの感染症拡大防止のため、だれも見まいにこられない。ベッドの上での生活にいや気がさしているぼくは少しイライラしながらも、その囃子に合わせて指でリズムをとる。

それにしても親友の良介はこのところ連絡も来ない。

「ねえお母さん、良介はどうしたのかな。」

見まいはせいげんされているとはいえ、ぼくはイライラしてたまらなかった。

「よくわからないけどお祭りの練習に行っているって良介さんのお兄さんが言っていたわよ。」

良介はぼくの大事な友達なのに見まいのメールもくれないで太鼓の練習。ぼくのことをどう思っているんだ。良介なんかもう友達じゃない。

しばらくして、病院から一時退院のきよかが出て家に帰ることができた。帰るとぼくは、商店街に夏祭りを見に行った。ちょうど良介が山車だしの上で太鼓をたたいているところだった。全身あせびっしりになりながら、一生けんめいたたいている。



(ぼくのことよりも太鼓に夢中だなんて。)

必死にたたいている良介の気もちが気になってしかたがなかった。

次の日、久しぶりに登校した教室の前で良介にばったりと会ったので昨日考えたことを聞いてみた。すると、

良介はぼそつと答えた。

「じつは雄二のためにがんばっているんだ。」

「え……。ぼくのために……。」

良介の話は続いた。

「じつは、お母さんから雄二の入院のことを聞いていたけど、コロナのためにお見まいにも行けない。それに夜のメールのやりとりは、からだにもよくないとお母さんに言われてさ。そこで今年は雄二に毎日太鼓の音で元気をとどけようと思って練習していたんだ。」

ぼくは真っすぐに良介を見ることができなかった。

(良介はぼくをはげますために練習してくれていたのか。それなのにぼくは……。)



ぼくはしばらくだまりこんでしまった。

「来年はぼくもお囃子の練習を見に行っていきたいかな。」  
ぼくは良介に小さな声でたずねてみた。

「地いきの役員の人にも話してみるよ。八坂の夏祭りは、三百年くらいの歴史があってね、毎年だいにひきつがれているんだ。いっしょにやろうよ。そのかわり、礼ぎや約束もきびしいぞ。」

良介は笑顔で答えた。

そして一年後。ぼくは病院の先生から許可をいただき、良介と一緒にお囃子の練習をしている。  
テンツクテン テンツクテン テケテン  
バチをもつぼくたちの手は、あせでびっしょりになっていた。よし、明日は本番！二人のこきゅうもバッチリだ。



(注釈) 八坂の夏祭り やさか

八坂の夏祭りは三百年近い歴史と伝統をほこり、幸手の夏を熱気でつつみこむお祭りである。毎年七月の第三週日曜日の夕方には、「花山」と呼ばれる立派な山車の曳回しが行われ、駅前を駆け上がる勇敢な姿には、毎年大きな拍手と歓声が送られる。

